

記憶に残る私の仕事,そしてあの街

「配筋標準」から「配筋指針」へ



松下一郎

電気通信省（電電公社を経て現 NTT）に就職し実務についた 1950 年ごろは、電話交換機を収容する局舎の構造が、木造から鉄筋コンクリート造（以下 RC 造）へ変わりはじめた時期でした。通話の全国自動即時化を実現させるために多数の電話局を必要とし、その建設を担務する建築部門は多忙ながら活気に満ちていました（自動即時化の実現は 1978 年）。電電公社の建築局では、この大量業務を遂行するためのマニュアルとして各種の業務標準を整備しました。

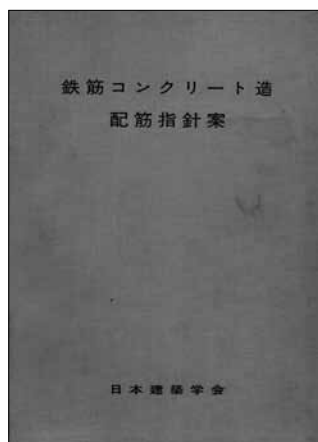
電電公社建築局が制定した標準類は、建築基準法、日本工業規格（JIS）、日本建築学会の諸規準などに準拠しながら、電話局舎としてのニーズを加味して作成されました。しかし、RC 造の配筋関係については、「建築基準法施行令」・「鉄筋コンクリート構造計算規準」・「JASS 5 鉄筋コンクリート工事標準仕様書」などの記載内容が不十分で、配筋図の作成、配筋組み立てなどの実務指標として不満を感じていたので、実用的なマニュアル作りの必要性を提案しました。

諸事、言い出しつべに降りかかるのが世の常で、案の定このマニュアル作成を担当することになりました。実用的な RC 造配筋マニュアルとするため、準拠規準類に記載されていない事項を増補するのは勿論、使い勝手を考え部位別に配筋要領を示すスタイル（例えば「柱」の項には、柱まわりの配筋要領をすべて記載し、「柱」以外のことには触れない）にまとめることにしました。この作業成果は、「施設局舎鉄筋コンクリート造配筋標準」（以下「配筋標準」）として電電公社建築局の標準類に加えられました（初版 1962 年）。

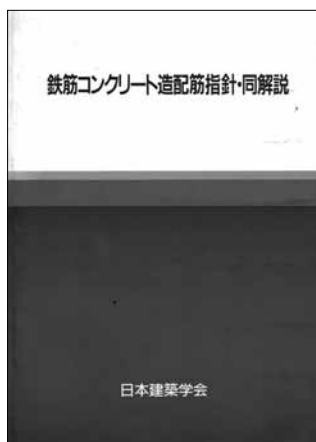
後年、電電公社での「配筋標準」作成や、労働省所管の

「鉄筋組み立て技能士」制度立ち上げと試験実施に関与した実績から、日本建築学会の材料施工委員会に設けられた「鉄筋工事小委員会」（委員長：小倉弘一郎）の委員として「鉄筋コンクリート造配筋指針案」（以下「配筋指針案」）作成のお手伝いをするようになりました。「配筋指針案」（1979）上梓の数年後、見直したうえ「案」から「配筋指針」に昇格させるための改定 WG が編成され、参加することになりました。この WG には、学者、官庁、ゼネコン、設計事務所、製鉄、鉄筋業など幅広い分野の人が集められ、委員長の人柄とあいまって、和気あいあいと忌憚なく意見交換できる楽しい雰囲気だったことを懐かしく思い出します。改定作業は、「配筋指針案」で宣言された配筋の三原則（①力学的に合理性があること、②物理的に組み立てできること、③施工が容易であること）を基本としてすすめられ、検討結果をまとめるにあたり、使い勝手のいい電電公社「配筋標準」の部位別表示スタイルで「各部配筋」の章をまとめることになりました。このスタイルは、現行の日本建築学会の「配筋指針」に継承されています。

「配筋指針案」が改定されて「案」がとれ、「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説」となった 1986 年から数えておおよそ四半世紀が経ちました（最新の指針は数次の改定を経た 1910 年版）。「配筋指針」での提案が設計・施工の実務面に浸透している証しを街の工事現場で見受けると、少しお役に立てたような気がして嬉しく思っています。



左：「鉄筋コンクリート造配筋指針案」（1979）



中：「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説」（1986）

右：「同 左」各部配筋の部位別表示スタイル例

